

5) メディアの立場から

医療ジャーナリスト ロハスメディア代表 川口 恭(かわぐち やすし)

救急医療の疲弊は、『「看取り」は医療なのか』という根本の議論を棚上げしたまま進められてきた医療機関の機能分化と連携、そして療養病床削減によって、需給のギャップが危機的状況になっているためと考えられる。現状がいかに無理筋か、電力のスマートグリッドと対比させることで、一般の人にも分かりやすく示したい。さらに、時間が許せば、以下のことも説明したい。

医療供給を増やすのか、「看取り」を医療の対象から外すのか、国民的な議論が必要であり、それを避けていると、なし崩しに孤独死などが続出することになって、とばっちりで医療への国民の憎悪が高まる恐れもある。

国民的議論の先導をマスメディアに期待しているかもしれないが、この国のマスメディアの仕事は人のフンドシで相撲を取ることであり、自らリスクを取ることはない。まずは状況をよく分かっている医療者の行動が必要だ。誰かがやってくれるだろうと期待していると手遅れになる。

講師紹介

京都大学理学部卒業、朝日新聞社記者を経て、若者向け新聞『seven』の創刊および土曜版『be』の創刊に参加、現在、「ロハスメディア社」代表、『ロハス・メディカル』を出版